

七つの世界と七つの聖 劍

伊勢村誠三

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今まで執筆活動中にネタが詰まった時に息抜きで作っていたものがなんとなくそれっぽくまとまったので、没ネタ供養で短編集にします。

仮面ライダーセイバーとその他多数のクロスオーバーです。

誰か続き書いて（他力本願）

目次

絶対に俺の決断はまちがってない。

1

この二本の忍者剣に祝福を！ —— 4

聖剣絶奏ライダースラッシュユJIK（銃
でGOGO！否！剣で行くぞ！）

8

水勢剣と三人のプリンセス —— 13

聖剣剣士ランプ☆ド☆エスパード

21

銀魂聖剣乱舞 —— 27

はじめに炎の剣士あり —— 33

絶対に俺の決断はまちがってない。

「ねえヒツキー。ゆきのんに謝ろうよ。」

またこれか。彼、比企谷八幡は横を並んで歩く少女、由比ヶ浜結衣のセリフに地獄よりも深いため息が出そうになる。

自分のあの時の判断を間違ってると思ってないというのも勿論有るが、それ以上にこれから向かう先に待ってると分かりきってるものが何度体験しても慣れるものではないからだ。

「とにかく、行こう。」

「……うん。」

そうして奉仕部の部室に向かうとやはり雪ノ下雪乃は部室の外で中の様子をうかがっていた。

八幡は彼女を押しよけると部屋の真ん中に刺さっている剣、闇黒剣あんこくけん月闇くらやみを何のためらいもなく引き抜いた。

瞬間、腰に現れたベルト、邪剣カリバードライバーに一度剣を納刀し、ホルスターにっていた神秘の本、ワンダーライドブックを取り出す。

「くっそ……また、またなのかよ?」

何度シミュレーションして未来を疑似体験してもどうしてもだめだ。

絶対に自分はこの剣を手にするし、この世界は崩壊寸前まで行く。

どんなに自分が知恵を絞って死力を尽くしてもこの世界を救えない。

(やるしかないのか? ほかの…聖剣使い達に助けを求めるとか…)

ついこの前のシミュレーションにて、八幡は初めて手を差し伸べられた。

『どうか一緒に戦ってくれ。』

カリバー、あなたの力が必要なんだ。』

眩しい、炎のような、赤。

この闇黒剣をベースに作られた火炎剣烈火の騎士は仮面越しに八幡の目をまっすぐ見据えて手を差し伸べた。

共に居た風双剣の騎士と雷鳴剣の騎士も頷く。

それでも、八幡は手を取れなかった。

なぜならそれはあまりにも、八幡の身を焦がすほど眩しく、

(認められない……ここにきて、まだ本物なんかじゃないあいつらを頼るなんて…)

〈ジャアクドラゴン!〉

ワンダーライドブックを開き、物語の朗読が始まる。

〈かつて、世界を包み込んだ闇闇を生んだのはたった1体の神獣だった…〉

本を閉じ、闇黒剣月闇に読み込ませる。

〈ジャアクリード!〉

本をバツクルにセット。

両手で持った闇黒剣のそこでスイッチを押す!

「変身!」

〈闇黒剣月闇!〉

〈Get go under conquer than get keen.〉

背後に出現した巨大な闇黒剣型のゲートから出てきたドラゴン型のエネルギーをまとい、八幡は仮面ライダーカリバーに変身した。

〈ジャアクドラゴン!〉

〈月闇翻訳! 光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する!〉

「じゃあな」

ただただ目を丸くして動けない二人にじゃあなと短く告げて八幡はその場を後にした。

この二本の忍者剣に祝福を！

あの日のことはあんまりにも鮮明に覚えている。

「貴様程度の剣は当たらん！」

そんなことはわかってる。

自分の腕はせいぜい並みだ。ならどうするか？

武器は全部足元にある！

「カズマ！」

「カズマよせ！正面からでは敵わない！」

〈猿飛忍者伝！ニン！ニン！〉
さるとびにんじやでん

俺、佐藤和真は手にした聖剣、風双剣翠風はやてに『猿飛忍者伝』のワンダーライドブック

を押し込む！

「くらえ！」

誰もが目を伏せた。

この街の全員、俺のことをたまたま聖剣が抜けただけの奴と思ってるからな。

でも、それでいい。それで正しい。だから俺は…

「やああああああ！」

〈翠風！速読激！ニン！ニン！〉

体をひねりながらジャンプ！風の連撃で地面のあちこちに出来た水たまりを舞い上
がらせる！

「な!?これはあああああああ！」

流石に避けきれなかった敵、デユラハーンのベルディアが絶叫を上げて苦しみます。
その様子を見た後ろのほかの冒険者たちはポカーンと口を開けて驚いている。

「いまだ！カズマが作った隙を逃すな！」

冒険者仲間のキースの号令が響く！

一同が武器を持って前に出る。

「ま、待てよせ！来るんじゃない！」

何やらそれっぽい詠唱をアクアが、あのアホ女神が唱えだすと周囲から水が集まり、
巨大な塊、それも元氣玉みたいなサイズになりそれを発射しようと：

『セイクリッド・クリエイトウォーター』!!」

遅かった。

走り出していた冒険者たちを巻き込み

「ああ、くそっ……………」

もろとも洗い流された俺は意識を手放した。

目が覚めたのは翌日、拠点にしてる屋敷の自室でだった。

「あの後ベルディアは討伐が確認された。

最大の功労者であるカズマとアクアには町から感謝状が来てるぞ?」

聖剣使いだなんだと持て囃しておいて冒険者にしかなれないと知るとすぐに見放し、いざ聖剣を使いこなせば感謝状。

調子のいい奴らだと思いつつもそれを伝えに来た仲間のDM聖騎士のダクネスにそっか、と告げて立ち上がる。

「あれ?俺の剣は?」

「また例によってお前しか持てないからな。

これは持つてきたから散歩がてら取つてくるといい。」

そう言つてダクネスは猿飛忍者伝を手渡す。

それを受け取ると着替えてまっすぐ街の外に向かった。

思つた通り昨日ベルディアと戦つたのと同じ場所に翠風は2本とも刺さつていた。

「懐かしいわね。あなたそれを初期装備と勘違いして簡単に引き抜いて街中からすごい

目で見られてたわよね？」

「アクア、ついてきてたのか？」

今更俺がこれ言引き抜いたところで珍しくもなんともないだろ？」

そう言つて俺は二本の剣を引き抜き、一本にまとめると腰のホルダーに納刀してその場を後にした。

聖劍絶奏ライダースラッシュJ I K (銃でGOGO!否!
! 剣で行くぞ!)

「これで!」

「終わりデース!」

刃のついたヨーヨーと大鎌が彼女、立花響に振り下ろされる。

「立花!」

「よそ見とは感心しないな!」

風鳴翼はマリア・カデンツァヴァナ・イヴに、雪音クリスはノイズに邪魔されて迎えない。
い。

(私、死んじやう?)

彼女がやけにゆっくりと迫るように見える刃を見ながら思ったその時

〈銃奏〉

二つの刃が数発のエネルギー弾に防がれる。

響の背後から白いローブに黒いのっぺらぼうの様な面を被った何者かが躍り出る。

「な!?!」

「何者デス!？」

〈劍盤!〉

手にした武器を変形させ、劍型にするとそのまま二人、月読調に曉切歌に斬りかかる。「しばらく見えない間に随分と野蛮な真似をするようになりましたね。

月読さん、暁さん。」

「そ、その声は!」

何者かはフードと仮面を外してその素顔をさらす。

「セレナ!」

彼女たちにとってはもう一人の姉ともいえる少女、数年前ある惨劇を止めるために一瞬だけ出現した完全聖遺物を使って、死亡したはずだったセレナだった。

「あなたが立花さんですね? 妹分がご迷惑を。」

「え? あ、あの……」

「ご心配なく。落とし前はしつかりお付けますので。」

混乱する響を無視してセレナは手にした武器、音銃おんじゆうけんすずね、音銃劍錫音を逆手に持ち、片手でワンダーライドブックを開く。

〈ヘンゼルナツツとグレーテル!〉

へとある森に迷い込んだ、小さな兄妹のおかしな冒険のお話……

「変身!」

スロットにブックをセット。

順手に持ち直し剣を突き出す!

〈銃剣撃弾!銃でGOGO!否!剣でいくぞ!音銃剣錫音!〉

〈錫音楽章!甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む!〉

派手派手なショッキングピンクにコミックのカラーページのような派手なエフェクトを落とし込んだような仮面。

そしてアーマーのあちこちに見られるお菓子の意匠。

「遠からん者は音に聞けええええええええええええ!」

近くば寄って目にも焼き付けろおのおおおお!

この私こそがああああ!七つの聖剣の騎士が一人!

仮面ライダースラッシュ様だあああああああ!ベイベ!」

YOROSIKUUUUUUUUUU!と叫び終えるとさらに奇声を上げて切歌にとびかかり、パワーで強引に詰め寄り、首筋に刃を押し当て、思い切り引き下ろす!

「ぎゃあああああ!」

「切ちゃん!」

「あなたもです、月読さん!」

〈銃奏!〉

すかさずモードチェンジした武器でスラッシュは極めて冷静に調の両足、両肩、さらに発射寸前だったヨーヨーを撃ち落とす。

「が、がふ……」

「悪い子は、お尻ぺんぺんだぜえ!」

そう言つてスラッシュはまだダメージの抜けきらない切歌をつかんで調のほうに放り投げる。

そして一度スロットからワンダーライドブックを取り出し、剣に読み込ませる。

〈ヘンゼルナッツとグレートル! イエーイ!〉

「ママより怖いお仕置きです。お覚悟を。」

〈錫音読撃!〉

「はあああああ! はあ!」

収束されたエネルギーを思いきり突き出す!

超広範囲の衝撃波が二人を吹っ飛ばし、変身解除させるほどのダメージを爆炎とともに与えた!

〈イエーイ!〉

「うわあああああ!」

「闇黒剣月闇があればあなたたちのギアを封印した所ですが、今日は見逃します。」

「せ、セレナ……いったいどうしちゃったデスカ!？」

まさか……その完全聖遺物に何かされたデスカ!？」

「ギアに狂わされているのはあなたたちの方でしょう!？」

聖剣は違う! あんな腐れ外道の自己満足のために誂えられた物じゃない!

たった七本ある聖剣だけが比喩でもなんでもなく世界を救える!

ルナアタックや衛星落下なんか目じやない悲劇から!」

その場にいた全員が目を向いた。

その時始めてスラッシュの仮面が涙無理やりぬぐった後の顔のように見えたからだ。

「猶予をあげましょう。」

あの外道に良いように従わされ、この世界と心中するか。

二課の詰め甘い連中と仲好になって騙し騙し世界を延命させるか。

それとも我ら聖剣の騎士のと共に戦いこの世界を根底から救うか。

賢明な回答を期待します。」

そうとうと彼女は仮面ライダー専用層の一つ、ライドガトライカーをマシンモード、

三輪自動車型に変形させてそれに乗るとその場を後にした。

水勢剣と三人のプリンセス

「ユウキ！」

「王子はん！」

「あ、主、さま……………え？」

「なんだ、何かあると思えばこの程度か。つまらん。」

やけにゆつくりと沈んでいく完全に致命傷を負った自分の体と、置いて行かれたようにゆつくりと遅れて落ちてくる真つ赤な血を見つめながら少年、ユウキは頭の自棄に冷静な部分でこの状態をどうにかしようとしていた。

（クリステイーナからコツコロを守るために体ごと盾になったのはいいけど……これは、死んだかも。

左肩からバツサリ……………前にペコさんがやつつけた魔物もこんな風にやられてたっけ？)

もう、どうしようもない。

マホに直してもらおう？ 駄目だ。失敗する確率の方が高い。

コツコロは？ 駄目だ。魔法を使うという選択肢が上がるような精神状態じゃない。

(終われない。こんなところじゃ終われない！絶対に！絶対に！)
手を伸ばす。

何とか剣を杖代わりに立つことぐらいはと思うが、腕が石のように重い。
脛も、体も同じだ。

動かなきやいけない。それなのにそのまま彼は意識を手放した。

「その言葉に偽りはありませんか？」

気が付くとそこはどこかの街中。

そこから中にシャボン玉が飛び、空には竜の姿も見える。

ユウキに声をかけたのはそんな不思議な世界に不思議とマッチした青い革のコートの男性だった。

「私なら、あなたに力を託すことができません。

ですがそれは、あなたをさらに過酷な運命にいきない、

あなたの大事な人たちをも巻き込みかねない。

でも、あなたはこの力を手にしなければ間もなく死ぬでしょう。

時間はあります。よく考えて……」

男がいい終えないうちにユウキは手を伸ばした。

男は暫くユウキをじつと見ていたがやがて

「この剣を抜いてください。」

男はユウキの背後を指す。

ブロックノイズのような光と共にユウキの背後に一筋の水柱が立った。

ユウキは一瞬面食らったがゆっくりと息を吐き、それをつかむ。

〈すいせいけんながれ
水勢剣流水！〉

「はっ！」

ユウキは自分が前のめりに倒れそうになっていることに気づいて踏ん張った。

彼含めて全員が目を向いている。

傷口に指を這わせると、そこからおびただしい量の水が噴き出し、ユウキの腰に巻き

つく。

〈聖剣！ソードライバー！〉

赤い帯に黒いスロットが三つ着いたバックル、聖剣ソードライバーに何かを横向きに

差し込むスロットを見つけたユウキは立ち上がり、背中の剣を引き抜く。

剣にブロックノイズ上の光が走り、その姿を水勢剣流水に変えた。

納刀し、サイドのホルダーにマウントされていたワンダーライドブックを開く。

〈ライオン戦記!〉

〈この蒼き鬣が新たに記す、気高き王者の戦いの歴史…〉

「ほう? 犬に狐ときて今度は獅子か? 動物ならより取り見取りだな?」

そうやって好戦的に笑うクリステイーナにユウキは静かに言った。

「この聖剣に誓う…:皆も世界も、僕が救って見せる!」

バックル中央のスロットに閉じたライドブックをセットクリステイーナが走ってきたのに合わせて剣を引き抜く!

〈流水、抜刀!〉

「変身!」

クリステイーナの剣をはじいてポーズを取る!

背後に出現した本型のゲートから飛び出した青い獅子のエネルギーがユウキを包む

!

〈ライオン戦記!〉

〈流水一冊! 百獣の王と水勢剣流水が交わる時、紺碧の剣が牙を剥く!〉

仮面ライダーブレイズに変身を果たしたユウキはクリステイーナに向かっていく!

(面白いな…:本人の剣の腕はせいぜい並み。

だが避けられる攻撃は全て避け、受けられる攻撃は全て受けきれている。)

そして当てられる攻撃は全て当てている。

ブレイズには乱数聖域が通用していない。

「面白い！お前も倒してその鎧も剣もエルフの子供もバラバラにしてドロドロに溶けるまで研究してやる！」

両者剣の冴えが増す。だが絶対値と年季で圧倒するクリステイーナにだんだんとブレイズが推され始める。

「なあ、あれ、なんなんだ？」

戦いを見ていたコツコロにマコトが尋ねる。

しかしコツコロも首を振る。

「アメス様にも、あのような力はありません。

あれは恐らく、もっと別の聖なる力です。

聖剣ナガレ…主様、あなたは本当に一体……。」

「どうしたどうした！そんなものかああ！」

振り下ろされた剣についてブレイズが膝をつく。

だがブレイズは負けじとベルトのライドブックをタップ！

〈ライオン戦記！〉

クリステイーナとブレイズのちょうど間から青いライオンが現れる。

ライオンは彼女にかみつくとそのまま思い切り壁にたたきつける！

クリステイーナは崩れた壁の瓦礫と共に放りだされた。

「おおー！」

「あんなことまで……」

そのままクリステイーナを追おうとするブレイズ。

しかし

「王子はん！これ！」

マホが彼を引き留め、何かを握らす。

「それって！」

「ライオン戦記にそっくりさー！」

「マホマホ王国に伝わる秘宝どすえー。」

王子はん。これであいつを懲らしめとおくれやす。」

ブレイズは頷いてバックルの本を閉じると手にした新たなワンダーライドブックを

開く。

〈天空のペガサス！〉

へかつて蒼白の翼を持つ神獣が天から輝き舞い降りた……

スロットの右側に装填し、もう一度剣を引き抜きながら飛び降りる！

〈流水抜刀！聖なるライオンペガサス！〉

〈流水二冊！夜空を彩る獅子座が、流星の如く降り注ぐ！〉

新たに右肩の装甲を追加されたブレイズは腰のホルダーに剣を納刀し、居合斬りのような構えを取る。

「いい。お互い、命を張るとしようじゃないか！」

2人は同時に走り出し剣を振りぬく！

〈天空のペガサス！〉

しかしそれより早くブレイズはバックルのライドブックをタップし、剣を持つ手とは反対の手にエネルギーをため、クリスティーナの剣を肩で受け、手で押さえつける！

（引けない！しまった！）

〈必殺読破！ペガサス！ライオン！二冊撃！

ウオ・ウオ・ウオーター！〉

振りぬいた剣がクリスティーナの腹部を一閃。

さらにもう一撃右肩に深々と一撃。

クリスティーナが剣を落とすのとブレイズの変身が解除されるのは同時だった。

「は、ははははは！あーっはっはっはっはっは！

まさかこんな坊やに完全敗北を喫するとは！このクリスティーナ・モーガンも落ちた

ものだな！」

ダメーじ量で言えば完全にクリステイナーの方が上だろう。

だが、今彼女の利き手は完全に動かない。

剣士としてこれ以上致命的な傷はないのだ。

「名前は覚えておくよ。えーつと？」

「ブレイズ……水の騎士、仮面ライダーブレイズ！」

ブレイズ、ブレイズか。と何度かその名を反芻するとクリステイナーはその場を後にした。

サレンが駆け付けたのはその少し後のことだった。

聖劍劍士ランプ☆ド☆エスパルダ

〈必殺読破！〉

黄雷抜刀！ケルベロス！ヘッジホッグ！アランジーナ！三冊斬り！

サ・サ・サ・サンダー！

「トルエノ・デル・ソル！」

オラクルレイを足場代わりに電光石火の速さで距離を詰めてきた敵、仮面ライダーエスパルダゴルデンアランジーナは、腰のバックルから聖劍、雷鳴劍黄雷らいめいけんいかづちを寸分の狂いもなく彼女、美国みく織莉子おりこのソウルジエムめがけて振り下ろす。

覚悟して目をつむるが、肉を切る音も骨を断つ音も聞こえるが、いつまでたつても痛みは来ない。

目を開けると、そこには真つ二つになった相棒が重力に従って落ちていく場面だった。

（キリカ!?嘘…体ごと盾に?）

「無駄だ！」

エスパルダはすぐさま次の行動に切り替え、左の肩アーマーからランプの魔人を召

喚。

織莉子の背後を取らせて頭から真つ逆さまに落とされる。

魔法少女故、常人よりパワーは有るが、近接戦特化ではない彼女には振り払うことはかなわない。

〈必殺読破！〉

ケルベロス！ヘッジホッグ！アランジーナ！三冊撃！

サ・サ・サ・サンダー！

「オーロ・ボンバルデーロ！」

その場で体をひねったエスパーダの尖った雷をまとったキックが織莉子の上半身をえぐり飛ばした。

べちゃー！と汚い音を立てて残った下半身は断面から地面と激突する。

「世界を救うのは、俺だ……。」

「いやあああああ！はあ……はあ……うぷっ！」

ベッドから飛び起きた美国織莉子はくつついて寝ていた親友、呉キリカをやや乱暴に振り払うとトイレに駆け込み、こみ上げていた全てを吐き出した。

（また、この夢……違う、未来。）

どれだけ選択を変えても、必ず奴が、仮面ライダーエスパードが自分もキリカをも斬る。

最初は相打ちまで持ち込めていたが、どうゆうわけか彼は次々新しい力を、仲間を手に入れていき、最初は一冊だけだった本の力も三冊。

最初はいてもバママミしかいなかった協力者も予知を重ねるたびに佐倉杏子、千歳ゆま、果ては何度も殺し合ったはずの暁美ほむらとも手を組み立ちはだかった。

「お前らでは世界を救えない。

世界を救うのはこの俺と雷鳴剣黄雷！

仮面ライダーエスパードだ！」

不敵に言い放つ奴の姿が何度もフラツシユバツクする。

それにつられて何度でも鮮明によみがえる崩れ落ちる自分と、キリカ。

「エスパードあああああ！」

織莉子は吐き気と戦いながら憎々しげにその名をつぶやいた。

いつも夢に見る。

いや、夢だけではない。

昼起きていてもふとした時に思い出す。

それは滅んでしまったあの世界の記憶。

『富加宮…剣に、無茶をさせるなよ？お前は親父そっくりだからな…』

先代スラツシユは敵の幹部と相打ちになり

『お前ら！未来は、お前ら若いのに任せたぞ！』

先代バスターは殿を務めて

『賢人…芽衣さんを、頼みました…』。

鍛錬は怠らず、甘いものはちゃんと節制してくださいね？』

先代ブレイズは愛した女性を守って

『くそ…くそお！賢人君…俺、悔しいよお。

賢人君みたいにもっともつと強くなりたかったのに！

こんな所で終わりなんて…くやしいよおおお！』

先代劍斬は自分の腕の中で

『賢人お！やれええええええ！』

先代セイバーは、裏切りの騎士、カリバーの隙を作るために、息絶えた。

皆、目の前で死んでいった。

そしてカリバーを倒し、残る幹部たちも倒した。

けど、間に合わなかった。

「ああ……あああああ……」

ごめん、ごめんよ皆！俺は、俺は世界を救えなかったあ！

うわあああああ……」

他の世界に散らばっていく聖剣を掴むことはできなかった。

自分の雷鳴剣が飛んで行かないようにするので精一杯だったのだ。

そして気が付けば自分は、剣ごと別世界に飛ばされていた。

『……と君。賢人君！』

「……蓮？」

「？ ゆまはゆまだよ？」

どうやら転寝をしていたらしく、エスパード、富加宮賢人は起き上がりながら自己嫌

悪に陥った。

(馬鹿か。蓮がこんな綺麗なソプラノボイスの女の子な訳ないだろ。

あれは、夢だ。過去の、夢だ……。)

「ぐあいわるいの？」

「いや、平気だ。少し寝ぼけてるだけで、いたって健康だ。

ゆま、お前こそ毎晩遅いんだから寝れるときにしっかりと寝ておけ。」

「じゃあ賢人君！またご本よんで！」

「いいぞ？何がいい？」

「トライケルベロス！」

「わ、ワンダーライドブック!？」

「だめ？」

「駄目じゃないが……。」

その注文はちよつと予想外だったな……。」

ちゃんとした寢床に向かいながら賢人はどうやったらかこの本を読み切れるものかと
思案した。

銀魂聖劍乱舞

「無駄だ無駄だあー！」

ズオス・プレデターが二本の短剣を振るう。

発された衝撃はが剣斬、スラツシユ、そして一緒に戦うことになった夜兎という種族の少女、神楽を吹き飛ばし二人のライダーを変身解除させた。

「神楽ちゃん！和真君！セレナさん！」

協力者の青少年、志村新八しむらしんぱちと超大型犬の定春さだはるが駆け寄る。

彼がすぐに逃げてくれれば三人は助かるだろうが、それはない。

真つ先にやられて動けない比企谷八幡、仮面ライダーカリーバーは何度も見た、ついに現実となった未来にうんざりした。

（過程も結果も変わらない。）

まず俺はあの世界を守り損ねて他の世界を救ってきた富加宮に出会って、

勝手についてきた雪ノ下、由比ヶ浜と異世界に行く。

そして佐藤達と会って、カデン…なんとかと出会って、

そしてなぜかこの世界についた時点で富加宮とはぐれて……こうして全滅させられる。）

自分なりに足掻いたつもりだったが、

所詮自分など、聖剣が振るえてしまっただけの男。

何かを成し遂げることなど不可能だった。

（あーあ。詰まんねえ人生だった。）

「くっそー！」

「前よりも、強い！」

「当然！俺に一度見た攻撃は通用しない！」

お前たちは所詮！俺が強くなるための餌なんだよ！」

そう言い放つてズオス・プレデターは生身になった二人に斬りかかる！

が、その脳天に細長い何か投げつけられる。

『洞爺湖』と銘が、いや、銘じゃない。売られていた場所が刻まれた木刀だ。

「久しぶりに帰ってみれば人様の家の前でギャーギャーギャーギャー騒ぎやがって。

野良だけに発情期ですかコノヤロー。」

そう言つて現れた独特な声音の持ち主は変な格好の男だった。

肩肌脱ぎの着物と黒い半袖に長ズボンにブーツのコスプレの様な恰好。

銀髪の天然パーマ。

そして八幡にも劣らない腐った眼。

しかしそれは確かな光を宿しまっすぐ前を見つめている。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

その男こそが、二人が働く『万事屋銀ちゃん』のオーナーにして行方不明だった侍。

坂田銀時だった。

(馬鹿な！こんなの、俺が見た未来には…)

「新八！神楽！どうやらしっかりやってたみたいだな。

引き立て役はそろそろ引っ込んであとは主役に任せときな。」

「任せときなつて…銀さんもしかして背中にしよつてる剣は！」

「ああ。俺もジャンプ主人公の端くれ。

敵と会うたび進化する。

かめはめ波の続いて正解までしっかり習得してきた！」

「いやそれ斬魄刀というには最初から刀から離れすぎでしょ？」

「おもしろき西洋大剣じゃないですか！それタイトル詐欺になりませんか？」

「別にいだろ？斬魄刀だって始解の段階で槍になったりするやつもあるんだこれぐらい

…

「だーかーら！聖剣だって言ってるでしょ！いい加減名前覚えろ！」

「正解じゃなくて変身だって何度言ったら分かる！」

肩で息をしながら全力ダッシュで追い付いて来た賢人が最後の域を全部吐き出すように突っ込む。

「おー賢人、ようやく追いついたか。」

「オイ新八。こいつ、行った先で会ってなかなか才能あるやつだな。」

「次期ツツコミ王とも目され…」

「アンタが勝手に言ってるだけだろ！」

「ここ敵の前なんだよ！もつとまじめにやれ！世界の危機だぞ!？」

「なああんた！この甘党テンパ侍はいつもこんななのか!？」

「新八、銀ちゃんどっか行ってた間もやることなんも変わってなかったみたいアル。」

「そうだね…そしてちゃっかりあの賢人って人にも迷惑かけまくってたみたい。」

「みてよ。賢人さんのバック、お菓子とかジャンプがはみ出てる。」

「しつかりと銀魂に毒された賢人になぜか新八はサムズアップを送った。」

「はあー！まあ、いい。」

とにかく俺たちが来るまでよく耐えてくれた。

あとは任せろ！」

〈ランプ・ド・アランジーナ！〉

〈ニードルヘッジホッグ！〉

賢人はソードライバーに二冊の本を、銀時は背中から抜いた土豪剣激土に

〈玄武神話！〉

〈かつて、四聖獣の一角を担う強靱な鎧の神獣がいた…〉

ブックをセツト。

大上段に構えて振り下ろす！

〈一刀両断！〉

〈黄雷抜刀！黄雷二冊！〉

〈トゲ！トゲ！ランプドヘッジホッグ！〉

〈ブツた斬れ！ドゴ！ドゴ！土豪剣激土！〉

激土重版！絶対装甲の大剣が、北方より大いなる一撃を叩き込む！

賢人は仮面ライダーエスパーダ、ランプドヘッジホッグに。

銀時は土灰色の重装甲にオレンジ色の複眼の仮面ライダーバスターに変身する。

「新しいライダーか。まとめて喰らってやる！」

「飲まれんのは酒とパフェだけって決めてるんでな。」

悪いがさっさとおかえり願うぜ！にゃんこちゃんよお！」
走り出すバスターとエスパーダ。

全くの未知の事態への混乱。

言い知れぬ敗北感。

そして自分自身に対する怒りとやるせなさ。

そのすべてを一度に感じながら八幡は空を仰いだ。

はじめに炎の剣士あり

彼女^{かれ}は、同じ顔の者が後二人いるとしても、¹

当然ながらこの世に一人しかいない存在だが、最も適切な評価が『どこにでもいるや
やオタク気質な高校生』としか言えない存在だった。

部活には所属せず、図書委員の仕事に精を出し、

勉強は極端に出来ないのは英語ぐらいで、

他は上の中から中の下まで様々。

欠点らしい欠点と言えばやや機械音痴なぐらい。

恐らくよっぽど荒れて無い限りどの学校にも一人は居そうな存在。

それが『トウマ』という少年^{しょうねん}だ。

あの日、世界がほどけるまでは。

『はあ……………はあ……………』

地面が黒く染まり、白く光る大地の内側に吸い込まれていく。

まるで少し前に見た映画の主人公が追いかけてくるクレバスから逃げるように『トウ

マ』は逃げていた。

『こんな、こんなところで…』

死にたくない。

足がもつれて倒れる。

多分、全身が地面と熱烈にハグするより日々に巻き込まれて落っこちるのが早い。

『それでも！あきらめない！』

こんなところで、物語を終わらせない！』

虚空を掴む。

じゅつ！と、自分の手から熱したフライパンに水を入れた時のような音がした。

いつの間にかその手は、真っ赤に燃える鋼の剣を掴んでいる。

反射的に手放しそうになるのをこらえた。

大火傷をする羽目にはなるが、これを支えに立てば逃げ続けれる。

『あああああああああああああ！』

剣を強く握りしめ、どうにか踏み出した次の一步でまだギリギリ地面になってくれる石段を踏みしめる。

〈聖剣！ソードライバー！〉

〈火炎剣烈火！〉

『え?』

気付けば手の火傷も剣の炎も消えていた。

代わりにその手には見慣れない両刃剣が、その腰には黒いすろつつが三つついたベルトが装着されていた。

驚く間に崩れた地面の下に落ちていく。

けど不思議と『トウマ』に焦りはなかった。

『ふっ!』

バックルに剣を差し込み、ベルトの脇のホルダーに刺さっていた四角い物に手を伸ばす。

赤い手のひらサイズの物の表面には、まるでファンタジー小説の表紙のように赤い龍の絵と『BRAVE DRAGON』と英字で書かれている。

(本だ…)

〈ブレイブドラゴン!〉

へかつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた…

ベルトにブックを刺し込み、納刀していた火炎剣を引き抜く!

「変身!」

〈烈火抜刀!ブレイブドラゴン!〉

〈烈火一冊！勇氣の龍と！火炎劍烈火が交わる時！

真紅の劍が！悪を貫く！〉

トウマの姿が赤い龍を模した右半身を持つ戦士に変わった。

黄色い複眼が遠ざかる地面だった場所を睨む。

『飛び上がる！』

〈ストームイーグル！〉

〈ふーむふむ！習得一閃！〉

ホルスターにもう一つはまっていたブックを剣先に読み込ませる。

アーマーの背中に赤い翼が生え、裂け目に向かって飛び向かう。

『ふっ………!?これは……』

「世界の終わりさ」

誰にも向けていなかったつぶやきに返答があった。

ふり返るとそこに金色に輝く劍があった。

中心部分の四角い所によく見ると小さく顔のような物が有る。

「このままでは世界がすべてほどけ切ってしまう。」

まあ、そのおかげで世界の裏側にいた俺も巻き込まれず以上を察知して脱出できたわけだが……」

『あなたは一体…』

「おっと、申し遅れた。」

俺は仮面ライダー最光。世界の守護者たる聖剣使いの一人だ。」

『聖剣そのものではなく?』

「まあ、そこら辺は俺自らが望んでやったことと不可抗力が絡み合ったひどく厄介な理由があつてな。」

そんな事より、今代のセイバー。世界を救うために俺と共に戦つてほしい。

俺は見ての通り剣士としての力を十全に発揮できない!」

頼むこの通りだ!と、いつて浮遊する生きた剣は頭を下げた。

刃が当たりそうになって危なかつた。

『…私は、自分の物語をまだ終わらせたくない。』

戦い方を教えて!ブックの使い方と違ってこっちは何も教えてくれない。

むしろこっちからお願ひする!戦い方を教えて!』

「…いいだろう。俺を掴め!」

セイバーが最光を掴む。

その瞬間、二人の姿はその世界から消えた。